

自由5

ニホンザルの分子生物地理学的研究
吾妻健（帯広畜大・生物資源科学）、川本芳
（京都大・霊長類・集団遺伝）

前年度では、骨片からのDNAの抽出方法として優れた方法を開発し、試みたすべての骨片からPCR法により増幅に成功したことを報告した。今回は、この方法により岩手県の山形村より入手した、ミイラ状の皮膚片からDNAを抽出し、PCR増幅後、塩基配列を決定して現存の東北地方のニホンザルの相同部位の塩基配列と比較検討したので報告する。使用したプライマーはミトコンドリアDNAのDループの始めの約240ベースペアの領域に対応する配列である。今回、検討した現存の東北地方のサルは、白神（青森）、鰐ヶ沢（青森）、大船渡（岩手）、陸前高田（岩手）、住田（岩手）の5個体である。このうち白神は骨からのものである。その結果、岩手県山形村のミイラ状の皮膚片の配列は大船渡（岩手）の配列と全く同一であったが、同じ岩手県産の住田とは240ベースのうち6ベース、陸前高田とは7ベース、それぞれ異なっていた。また、白神の骨から得られた配列は同一の地域集団と思われる鰐ヶ沢の個体と全く同じ配列を示したが、山形村のものは7ベース異なっていた。東北地方のサルはミトコンドリアDNAのRFLPで見ると、三つの型（1型、2型、15型）に分類される（川本、1997）が、今回の配列の結果から明らかなように、岩手県山形村のサルは、2型（大船渡）と同一の配列を有し、1型（鰐ヶ沢）や15型（住田）とは、明瞭に区別できることが分かった。このことから、岩手県山形村には、かつて五葉山と同じ母系に由来する個体群が生息し、東北地方の他所と異なる起源をもつ個体群を形成していたと予想できた。

自由6

ニホンザルにおける敵対的交渉パターンの群間比較

栗田博之（京都大・霊長類・生態機構）

ニホンザルにおけるケガの多さについての群間比較を行った。

霊長類研究所の屋外放飼場で飼育されている高浜群と長野県志賀高原にある地獄谷野猿公苑において餌付けされている群れを対象として予備調査を行い、宮崎県串間市にある幸島で餌付けされている群れ（主群約70個体）と大分県大分市で餌付けされている群れ（A,B,Cの全3群で約2,000個体）を対象として本調査を行った。宮崎県串間市の都井岬に生息している群れについての調査も試みたが、人に不慣れで十分な観察ができず調査を遂行できなかった。以上により本報告では、幸島群と高崎山群について現在までに得られたデータについての分析結果を述べる。

観察部位は、耳・前肢の指・後肢の指である。耳は古傷の有無（小さな傷を除く）を、前・後肢の指については、欠損なく爪まであるかどうかについてを観察した。対象個体は5歳以上のメスで、標本数は幸島群 13個体、高崎山群 17個体である。なお、奇形であると思われる部位は分析に用いなかった。

（結果）

指の欠損が見られた個体の割合は、幸島群・高崎山群ともに前肢・後肢、左右のいずれにおいても、0%であった。一方、耳の古傷は、幸島群では右耳：0%；左耳：8.3%、高崎山群では右耳：37.5%；左耳：43.8%であった。

前肢・後肢の指の欠損は、皆無ではないが、あってもごくわずかの個体にのみ見られ、少なくとも観察対象個体中には見られなかった。耳の古傷は比較的多くの個体で見られ、群れ別に見ると、幸島群に比べて高崎山群で多く見られるが、高崎山群の場合全メス数に比べて対象個体数がかかなり少ないので、この傾向が確かであるかどうか今後標本数を増やして検討したい。また、他の地域の群れについても観察を行い、より多くの群れ間で比較をする予定である。